

〈本文〉

八番

左 氷柱つらら

風に来て氷柱に下がる楓哉

一桃

右 勝

門閉て閑居をしゆる氷柱かな

琴風

氷柱に下がる楓、ほのかなるけしき

細くからびて哀なるに、右はなを

烟たえぐくにして、律の後は

つららに門を閉ちたる閑居の扉

感情まさりたるやうに覚侍る

〈現代語訳〉

左 氷柱

風に吹かれ飛んで来て、氷柱にぶら下がっている楓であることだ。

* 「氷柱」はつらら。ただし、「つらら」は和歌・連歌では「氷」の意となる（「つららとは、薄氷をいふ」『能因歌枕』。『源氏物語』（末摘花）の「朝日さす軒の垂氷はとけながらなどかつららのむすぼほるらむ」の例では、つららを指す「垂氷」と「つらら」（氷）を別に用いている。室町時代以降は、氷ではなく「つらら」を氷柱そのものとする用例も散見されるが、連歌においては『毛吹草』（連歌四季之詞・中冬）に「氷柱・たるひ」とそれぞれ挙げるように、「つらら」は歌語と同様氷の意で用いられたようである。従って、現代語の意味と同じつららを「氷柱」として詠むのは俳諧からと考えられる。「打ち折りて何ぞにしたきつららかな」（『あら野』・仲冬・八〇六）。「楓」は、季は秋。「蛙手」の変化した語とされる。紅葉といえば楓の紅葉を指すことからか、和歌・連歌・俳諧ともに「楓」を詠み込んだ用例は意外に少なく、「紅葉」を用いることが圧倒的に多い。冬の句ではあるが、手のひらを想起させることから、「氷柱」をつかんでいるような「楓」を詠み込んだのであろう。

右 勝

門を閉じて閑居を強いるように、垂れ下がっている氷柱であることだ。

* 「閑居」は世間との交わりを立ち静かに暮らすさま。本句と類似した景の和歌の例に「山家冬月といふ心を詠める／柴の庵は軒の垂氷に閉ぢられてわづかに

ぞもる冬の夜の月」(『玄玉集』・三三三・性我)がある。「をしゆる」は「教ゆる」の意にもとれるが、判詞や句意から、本来八行の動詞である「強ふる」をヤ行動詞「しゆる」と表記したと考えたい。右の歌例のように、庵などのわび住まいがつららにより閉じられていると詠むのが常套だが、つららが閑居を強いている、とする点が本句の眼目。

〈判詞〉

左の句の氷柱にぶら下がっている楓のかすかな様子は、枯淡の趣がありしみじみとした風情であるが、右の句は、なんとと言ってもやはり、朝夕の煙が途切れるような暮らし向きで、葎が繁っていた秋の季節の後は、氷柱が門を閉じたとする閑居の扉のさまを詠んでおり、深い感動が勝っているように思われる。

* 「細くからびて」は、華やかさ艶やかさの対局で、枯淡の趣と哀れ深さのただようさまをいう。建仁二年(一一〇二)後鳥羽院が歌の様を見るため、当代の歌人たちに課したという『三体和歌』で、「秋・冬この二つは、からび細く詠むべし」との詠み様が示された。『続の原』秋部四番の湖春の判詞にも、「細くからびて言ひなせる」ため「勝」であるとしている。「烟」は、一般にはよく知られた仁徳天皇の「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」(『新古今集』・賀・七〇七、他)から炊飯の煙の意とされるが、ここでは広く暮らし向きをいうのであろう。山居から煙の絶えるさまを付けた連歌例に、「恵みの露も捨つる身は憂し／朝夕の煙も絶えし山の奥」(三島千句第六百韻・三六／三七・宗祇)などがある。「葎の後はつらら・…」の「葎」は茎や枝に棘がある草の総称。葎の茂る門は、「淋しくあばれたらむ葎の門に」(『源氏物語』・帚木)のように荒れた家をいう。「八重葎繁れる宿のさびしさに人こそ見えね秋は来にけり」(『拾遺集』・秋・一四〇・恵慶)のように、和歌では幾重にも繁る「八重葎」が多く詠まれた。門を葎が閉じたとする歌も「閑居／道も絶え門も葎に閉ぢられて見ゆらむものを独り臥すやは」(『御室五十首題和歌』・六四七・守覚法親王)などが見える。また、ここでは葎が棘のある植物であることから、同じ尖っているつららと対にしたか。「感情」は「感情^{カムセイ}」(『前田本色葉字類抄』。しみじみとした深い感動をいう。